取組

～２．ひとづくりを第１に考える
（さがす、つくる、呼び込む）～

■資質の違うリーダと補佐役を探す

地域活動を行うさい、同じ資質を持つ人同士が固まることがある。地域づくりは多様な問題が発生する。適材適所に人材を配することも重要である。

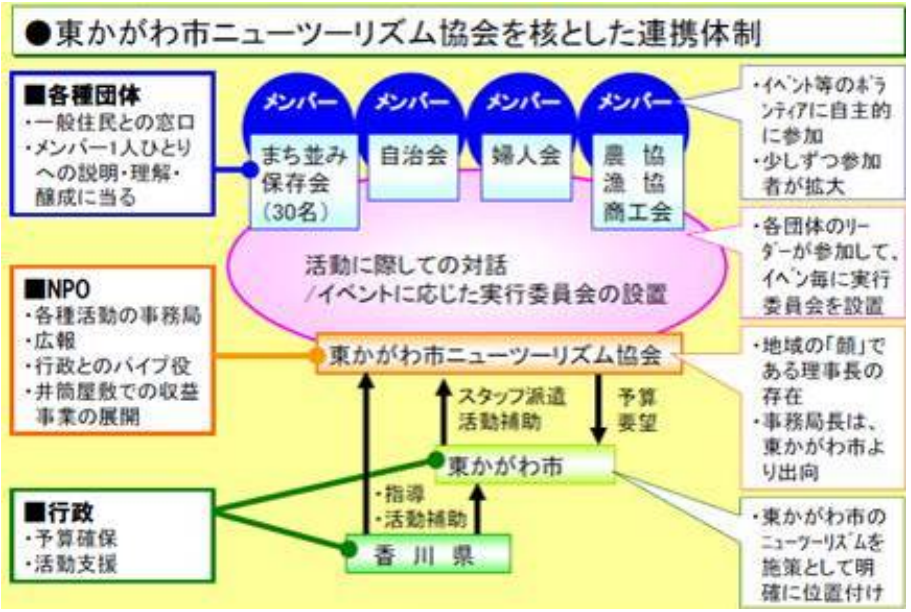
○地元とのパイプ役、行政とのパイプ役をさがす

～香川県東かがわ市引田地区～

東かがわ市ニューツーリズム協会理事長の大字さんは、旧引田町商工会を 35 年、東かがわ市商工会副会長 1 年を経て、東かがわ市ニューツーリズム協会の理事長に就任。自治会長も 15 年間務めており、文字通り地域の「顔」である。また、赤澤事務局長は、東かがわ市職員で、東かがわ市ニューツーリズム協会発足時から出向して事務局長を務める。理事長の大字さんを「師」と仰ぎ、地域住民の活動を支え、行政とのパイプ役として活動されている。この 2 人のタッグが、これまでの活動に際しての調整を円滑にしてきた原動力であったといえる。

○情熱のある人を探す、相談できる人を探す～徳島県徳島市～

新町川を守る会理事長の中村さんは、商店街の店主であったが、現在は川を綺麗に、水辺に人を集めたいという情熱で、ＮＰＯを立ち上げ、リーダーとして頭で考えるより先に行動してきた。決して「出来ません」と言わないことから、やると決めたことは必ずやり続けることを信条とされている。また、今や全国の水辺のまちづくりに関する講演会にも出かけていく。一方、建設関係の本業に就きながら、ＮＰＯの理事を務める新居さんは、中村さんの時には「暴走」しそうになるアイデアを、決して否定せず、相談しながらうまくコントロールし、形にしていく。全くパソコンを触らない中村さんに対して、新居さんはホームページを通じて継続的に情報発信をしたり、書類作成を行ったりと中村さんをサポートしている。



■地域外のファンをつくる

地域にたくさんの人に来てもらいたい、そのためにはまず知ってもらうことが必要であり、次に、ここに来たいと思ってもらわなければならない。そのための仕組みづくりや行動を怠ってはいけない。

○地域外とのネットワークの仕組みを考える

～高知県高岡郡四万十町～

四万十ドラマでは、商品開発と平行して、ネットワークづくりに取り組んでいる。会員への情報誌「ＲＩＶＥＲ」を通じて、地域の情報をダイレクトに“実況中継”することで、失いつつあるもの、残すべきこと、これからなすべきことを、地元は地元、都会は都会の立場で真剣に考えようとしている。情報誌には四万十川にちなんだ「付録」をつけて会員に届けている。「最後の清流を守りたい」「四万十川を次の世代に伝えたい」「自然を大切にしたい」といった数多くの声が寄せられている。

○外部からおもしろい人をひっぱってくることを考える

～徳島県名西郡神山町～

神山町で大南さんが目指しているのは、とにかく、人をコンテンツとしたまちづくりが出来ないかということ。スタートは今の住民になるが、人づくりは何十年もかかるので、まずは人集めだと考えている。神山に来れば、面白い場所で面白い人が面白い活動をしていると聞きつけて、さらに面白い人がそれに会いにくる。これを「カミヤマトライアングル」とよんでいて、面白い人をどんどん取り込んでいく。

「私達は、面白い人が活動するための場づくりをするのが仕事だ」

多様性のある変わり者が集まってきて、普通の人が発想しないようなものが創造される場であってほしいと考えている。

アーティストと住民・学生との交流

○イベントを支える人（地域の外交官として活用）

～高知県幡多郡黒潮町～

砂浜美術館の事務局開設後もイベント時に人手に困ることも多く、2000 年からは、イベント時のボランティアを募集している。今ではボランティアスタッフの存在は運営には欠かせない存在となっている。

全国各地から集まるボランティアスタッフは、イベント期間の 10 日間、黒潮町の廃校になった小学校を活用した宿泊施設に寝泊りしている。10 日間も滞在していると、世話をしている地元のおばちゃんたちと「第２のお母さん」のようなつながりが生まれる。そして、このボランティアスタッフ達が、黒潮町のこと、砂浜美術館のことを自分の言葉で広めてくれる。まるで「外交官」のようで、大きなパワーとなっている。

○地域外から訪れる人を増やす工夫（オーナー制度など）

～愛媛県宇和島市遊子地区～

段畑を守ろう会では後継者の育成が急務となっている。耕作者は平均 70 才を超え、耕作作業等は非常に重労働である。現在、その足がかりとして、「オーナー制度」を始めており、県内外から約 30 人がオーナーとして登録している。オーナーは馬鈴薯の植え付けや収穫等の農作業が体験できる。イベント開催や、オーナー制度などによって、まずは水荷浦に訪れる人を増やさないと「段畑」の保全の道は続かない。

○インターンシップで学生（＝若者）を受け入れてみる

～高知県高岡郡四万十町～

四万十ドラマではビジネスの展開にこだわり、原則としてボランティアではなく、インターシップの受け入れを積極的に行っている。将来スタッフとして加わってもらって貴重な戦力になる可能性があるからである。ＮＰＯ法人グリーンバレーにおいても、武蔵野美術大学からインターンシップを受け入れ、神山アーティスト・イン・レジデンスの企画や運営等で活動してもらっている。

砂浜美術館：ボランティアスタッフ

取組

～３．地元主体の組織をつくる～

■中心的役割を担う事務局をつくる

地域の活動を広げていくためには、活動の拠点や情報を集約する拠点が必要である。活動の母体として、多様な人々を連携し、柔軟な対応が出来る事務局が存在することは重要である。

○運営の根幹に関ることは事務局で、各事業は中心人物に任せる体制をつくる～徳島県名西郡神山町～

NPO グリーンバレーでは、組織そのもののあり方にも知恵を絞っている。現在、会員数は 50 名程度、理事 9 名、幹事 2 名であり、10 を超える事業を動かしている。これらすべてを 50 名の会員でやるとなれば、忙しくなりすぎて長続きしない。グリーンバレーには会員以外にも自分の意志で運営に携わって人がおり、それらを含めると大体 200 名くらいの実働部隊を形成している。この 200 名の人たちが分散してサポートしてくれるので、それぞれの個人の負担が小さくなる。組織的には NPO の理事会が立てた運営方針に従って、各事業がその周りを衛星のように回っているイメージである。各事業には、それぞれリーダーがおり、その人を中心に組織が運営されている。

新聞のように日替わり更新される「今日の神山」

○リーダーやメンバーがのびのび活動できる組織をつくる

～徳島県徳島市～

新町川を守る会として色々な事業を行っているが、それぞれの取組ごとに中心になってやってくれる人が集まってくる。その時、どの事業も、リーダーである自分がすべての人とつながり、全部責任を負うという態度を示すことが大切。メンバーにのびのび動いてもらうには、そういったリーダーの後ろ盾が必要だと思っている。300 名のメンバーの中にはいろんな能力を持った人が入ってくれており、新町川を守る会に入ることがステータスだと感じてくれている人も多い。

○団体や組織は一本化して強化する～高知県幡多郡黒潮町～

砂浜美術館の事務局を開設し、“楽芸員”などのスタッフがボランティアでサポートしてイベントの実行を行ってきたが、運営には町の補助金が使われ、活動には役場の職員が大きく関わっていたことから、町内から「砂浜美術館は、役場がやっている」「役場の業務としてやることなのか」といった批判を受けた。

「砂浜美術館」と「役場」の関係の見直しが行われ、“観光”という切り口で活動している「大方町遊漁船主会」「大方町公園管理協会」「大方町観光協会」をあわせた４つの団体を一本化し、法人化することとした。

異なる考え方を持った４つの組織が一つになったことで、どのようにして連携していくか、「砂浜美術館」のコンセプトをどのように活用していくか、どのようにして同じ方向に向かっていくか、数年たってようやく見えてきた。

土佐西大規模公園

■主役は普通の人である

地域づくりやまちづくりの主役は肩書きのある特定の人々ではなく、普通の地域の住民である。普通の人々が楽しみ、喜びを感じることができる地域を実現することが大切である。

○地域で普通に暮らす人を先生に活用する

～高知県高岡郡四万十町～

「自然の学校」は「ＲＩＶＥＲ」の会員向けに、四万十川で色々な体験をしてもらうことを目的として平成８年夏に開校した施設である。

「自然の学校」は、四万十川流域に住む「村の人」が先生になって、流域での生活で得た技術や知恵を人に教えたり、伝えたりする学校である。この学校では「エビタマ（エビすくい用の網）」でエビをとる」「自分の机をつくる」「薪を割って風呂に入る」「森を見る」などをみんなで体験する。参加者は、地元の人と料理を一緒につくったり、夜遅くまで語りあったりしたことを絵日記や作文に書く。地元の人も、都会の人たちと語りあうことにより、色々なことを感じている。そうした体験交流が双方のネットワークを広げ、より大きな展開を可能にする。

○肩書きで人を選ばない～愛媛県喜多郡内子町石畳地区～

石畳を思う会の重要な特徴のひとつは、地元の自治会や婦人会や既存の組織の肩書きのある人とは無関係に組織されたものであることである。この肩書きのない人たちによる組織が成長し、地域の人々もこの組織に大きな期待を持つようになってきた。この二重構造がうまく活動が進んできた要因でもある。

現在では、石畳を思う会の結成当時、年長であった人たちが各自治会の主要な役割を担うようになってきている。まさに地区全体として一体的に地域づくりに取り組む体制が出来上がってきている。

石畳の景観　弓削神社の屋根付太鼓橋

取組

～４．地域と行政の関係を築く～

■地域と行政の役割を決める

多様な主体が活動する地域づくりでは、その役割分担をしっかりと見据えないと、混乱を生じることがある。お互いの立場や得意な分野を考えて役割を決めることが重要である。

○できることできないことをきちんと踏まえる

～高知県室戸市吉良川地区～

吉良川のまちづくりでは、建物の修理や道の整備等のハード面については教育委員会が、町並みガイドや休憩所の運営といったソフト面については町並み保存会が役割を担当している。

例えば、現在、吉良川のまちなみ館は３軒目であるが、家賃は教育委員会が払い、管理は保存会がボランティアで対応するといった具合である。お互いの立場や、出来ること出来ないことをきちんと踏まえて、地域の実情に合わせて一つひとつ着実に活動を進めていく、そんな意識がそこにはあるようである。

○持続的な活動のための仕組みを用意する（指定管理者制度などの活用を地域と行政で考える）

～高知県幡多郡黒潮町～

2006 年 NPO 法人砂浜美術館は、公園管理協会の指定管理者制度を導入し、公園管理協会のスタッフ４名が加わり、現在はスタッフ８名で運営している。

砂浜美術館の活動が助成金や委託事業で成り立っていることから、今後は、自主的な収益活動にも力を入れていく必要がある。

砂浜美術館そのもののミッションを見失わないように、事業の内容と資金面での内容のバランスをとりながら進めていくことを常に意識していかなければならないと考えている。

吉良川のまち並み

吉良川のまちなみ館

■地域主導で行政と連携し活用する

地域づくりは行政主導で始まることもあるが、本来は地域住民が主体的に進めるものである。そして、地域の人々は行政と連携し、行政の資金やノウハウを上手く活用することも重要である。

○地域の活動を行政がバックアップする関係を築く

～香川県香川郡直島町本村地区～

ベネッセが直島で活動を始める前、1967 年に、藤田観光が「無人島パラダイス」をオープンしている。当時、第３セクターのような仕組みで、直島町や色々な企業に出資をしてもらい施設を作った。しかし、この後、国立公園の規制が新たな開発を阻み、景気の影響も受け、藤田観光は撤退し、町の開発は 10 年間放置された。

この経験を踏まえ、ベネッセは 100%民間として活動し、町が出資をする形で経営に参画することはなく、多方面からバックアップするという関係ができた。

○情報と知識を一番持っている行政マンとつながる

～愛媛県南宇和郡愛南町～

地元だけで開催した「へんろ道ウォーク」には 150 人、1998 年、内海 50 周年記念イベントとして、内海村・商工会など多くの団体で実行委員会を結成、地域が一体となった行事にしたら 350 人集まった。このイベントをしっかりしたものにすれば、村外の人向けにも発信できるのではないかと考えた。

情報と智恵と知識を一番持っているのは行政マンである。トレッキング・ザ・空海は、これをやるぞというものを持っていたから、活動を作り上げて、行政を動かそうと思っていた。「こういう組織を作るぞ。お金は出してくれ。でも、文句は言わんでくれ。」と。そうすることで、愛南町をつなぎ、宇和島、宿毛もつないでいった。

トレッキング・ザ・空海　青空コンサート

取組

～５．連携しあうことで可能性を広げる～

■連携によって活動をひろげる

様々な地域の資源が連携し、全体としてのイメージをつくり、強い発信力を持たせることが出来る。一人の力が限られたものであるとしても、たくさんの人の力がつながれば大きなエネルギーになることと相似した活動である。

○連携し合うことで発信力を広げる･高める

～高知県高岡郡四万十町～

2007 年から、「四万十また旅プロジェクト」として、四万十川流域 15 団体で、コンソーシアムを作り、体験型プログラムなどの観光資源を連携させて、回遊・滞在型観光ができる仕組みづくりを行っている。15 団体の中には、多種多様な団体が集まっており、これを活かして、「四万十川に来てもらう、高知に来てもらう」きっかけづくりのための仕掛けを行っている。

県内外に対して「四万十川の魅力を体験する」という四万十ならではの体験プログラムにより、体験型観光地としての「四万十川流域」の認知を計り、観光・集客の増加を目指している。また、それに付帯して新しい地域産品（観光商品を含む）を開発し、地域に根ざした新しい産業興しを行う。

個別のアイテムでは発信能力が低いので、連携しあうことで、より広く発信し、新たなプログラムを増やしながら、人材育成にも取り組んでいこうとしている。

現在は 20 アイテムほどのプログラムを、将来的には 100 ぐらいでの展開を目指している。

出典：四万十また旅プロジェクトのホームページ
http://www.gtf.tv/shimanto/index.html